

ドジョウずしが語るもの

Message Conveyed by Loach Sushi

日比野光敏

HIBINO Terutoshi

はじめに

- ①すしの形態分類
 - ②各地のドジョウずし
 - ③ドジョウが語るもの
- むすびにかえて

【論文要旨】

ドジョウは人間にとってたいへん身近な存在である。ドジョウというと子どもたちは、丸い頭と口のまわりのヒゲ、そして丸い尻尾を描くことであろう。大人にとっても、ドジョウすくいなどで親しみ深く扱われてきた。

ドジョウ鍋やドジョウ汁、あるいは蒲焼きなどとしてドジョウを食べることも、全国各地で見られた。また、めずらしいと思われるかもしれないが、ドジョウをすしにすることもあった。そのいくつかは、まだ健在である。ところが、その多くは、じゅうぶんな記録もされぬままに、消えてなくなろうとしている。本稿はドジョウずしを取り上げ、これらの正確なレシピを書きとどめることを第一目標とする。

筆者はこれまでに、ドジョウ（マドジョウ）のすしを長野県佐久市、愛知県豊山町、滋賀県栗東市、大阪府豊中市、兵庫県篠山市で調査した。また、シマドジョウやホトケドジョウのすしを栃木県宇都宮市で、アジメドジョウのすしを福井県大野市、岐阜県下呂市で調査した。その結果言えることは、ひと口に「ドジョウのすし」といっても、その作り方は一様ではない。それはすしの種類からみても、実に多くの形態に及んでいることがわかった。

その上で、ドジョウずしが消えてゆく理由、さらにはドジョウが語るものを考えてみる。

ドジョウはほかの淡水魚に比べ、特殊な存在である。体型は、われわれが食べ慣れているフナやモロコとは違って細長い。多くの大人たちが「魚は食べるもの」という情報は知っていても、その姿かたちはフナやモロコのように「魚の形」をしているものであって、ドジョウのように細長いものではない。それゆえ、食べることには、よくも悪くも、抵抗感がある。

加えて、子どもたちはドジョウを可愛らしく描く。保育園や学校では、日記をつけて観察させることもある。そんな「可愛い動物」を、なぜ食べなければならないか。ドジョウを食べることは、罪悪感まで生み出してしまおう。

かつては、自然に存在するものすべてが、われわれの「餌」であった。ドジョウだって同じである。ゆえに、自然に対して感謝したり恐れおののいたりする崇拜まで生まれた。だが、現在はどうか。自然に対する畏敬の念が、子どものみならず大人でさえも、なくなってしまった。結果、ドジョウは「可愛いもの」、もしくは逆に「普通の魚とは違う、異様な魚」となり、少なくとも「食べる存在」ではなくなってしまったのではあるまいか。

ドジョウずしが消えてしまった原因は、あくまでも人間が作り出したものである。ドジョウは、静かにこのことを物語っているのではないだろうか。

【キーワード】 水田、ドジョウ、ナレズシ、ドジョウずし、発酵